

井深対談

因縁に導かれるように……（１）

ゲスト：盛田 昭夫

盛田 昭夫（もりた・あきお）

1921年愛知県生まれ。1944年、大阪大学物理学部物理学科を卒業と同時に海軍に入り、技術中尉で終戦。

1946年、井深大氏とソニーの前身、東京通信工業を設立。

1971年、社長、1976年会長となり現在に至る。この間、モルガン銀行国際諮問委員ほか、欧米企業の顧問や、日米賢人会、日米経済諮問委員会のメンバーとしても活躍。日本きっての国際派経営者として、現在、経団連副会長。

1982年、英国王立芸術協会から日本人として初の、アルバート・メダル、そして1993年には、英国の産業振興と輸出促進への貢献により、名誉大英勲章を受章している。著書に『学歴無用論』『新実力主義』『MADE IN JAPAN』などがある。（財）幼児開発協会理事。

照れるよね.....

- 井深** いや、とっても不思議なことに、今までなかったのが、二人の対談.....。ほんとうは一回目くらいにあっても不思議でなかったんだけど、できなかったよね。
- 盛田** そうね。こっ恥ずかしいから、しないの。あんまり近いところにいるから、だめよ。お互いに照れちゃって.....。
- ところで、林原先生のことを書いた『インターフェロン 第五の奇蹟』という本、あれ、今読んでいます。まだ全部読めないでいますけど、林原先生のインターフェロンは幾ら飲んでも注射しても効かなくなるということがないんだそうですね。
- 井深** 免疫力そのものを高める薬だから.....。パイオで大腸菌から作ると、モルモットで自然に作るのと違いでしょうよ。今はアフリカでエイズの薬として認められ、やがてアメリカでも認可されるようだけど、やがて世界的なものになるんじゃないの。
- 盛田** 残念ながら、僕はもう、エイズにかかるチャンスがないからね（笑い）。
- 井深** そんなに言い切ってしまうほどのもんでもないでしょう。まだまだ（笑い）。
- 軽井沢ではゆっくりできるの？
- 盛田** 今年こそは、なんとかゆっくりしようと思っているんだけど、電話はやたらにかかってくるし、昨日も一日ちょっと日帰りで東京へ行きましたしね。また、ちょっと行く用事があるし。
- 井深** じゃ、ゆっくりは無理。
- 盛田** 夏は一月休むはずだって、家内には怒られるけど.....。
- 井深** じゃ、今年は休もうと思う、なんて言わないで、黙って休んだほうがいい。
- 盛田** そう。僕は井深さんにも黙って手術して、三週間病院へ入っていたことがあるんだ。みんな休暇だと思って、隣の部屋の井深さんも知らなかった。会社の中の誰にも言わなかったんですから。
- 井深** へえー、時々そういうことをしてたんじゃないだろうね。何か遊びのほうで（笑い）。
- 盛田** 病院へ入っていると分かったら、皆さんがお見舞いに来てくださると困るから。
- 井深** 三週間も.....！？
- 盛田** ちょうど三年置きに、お腹を二回切った。ちょうど、もう今年で三年前になる.....。
- 井深** 悪いのはどこだったの？
- 盛田** いろんなことをやりまして、まず初めは憩室炎といって、腸にちょっとポケットができるやつなんですよ。
- 井深** へえ。
- 盛田** それを取るために切ったり、次は大動脈瘤があるからって。
- 井深** あれあれ、それは、早く見つけて運がよかったね。
- 盛田** それで、もう分かっていたから、ずっとチェックしてたんですよ、半年ごとに。そして、だんだん大きくなってきたので、「取りますか」って。

僕はスキーが大好きなものでスキーをするために手術した(笑い)。この病気にスキーはいけないんですよ。冬の寒いところで動脈硬化するし、高い所から下に滑り降りるんだから、気圧が変わるし。お医者さんも「スキーをするなら取ったほうがいいですよ」と言うから、僕は「それじゃ、夏、取る」と言っ。お医者さんが笑って、「スキーのためにとお腹を切った人はあなたぐらい。そんな人初めてですよ」って(笑い)。で、夏休みに黙って三週間休んだ。

井深 じゃ、誰も知らなかったのね。それにしても幸運だったね。

盛田 ええもう、会社には、うちの秘書と大賀社長だけにちょっと言っておいたんですが、あとの人は誰も知らない。出てきてから、ちょっと病気だったんだよって。

井深 腸の袋のほうよりも大動脈瘤のほうがずっと怖いでしょう。

盛田 そう、大動脈瘤は爆発したら終わりですから。それをずっと、半年ごとにチェックしてた。今は超音波で分かるんですよ、大きさが。それをずっと見てた。夏に切って、おかげで、その次の冬には、ちゃんとスキーに行っていましたよ。

井深 スケートもするんだ。

盛田 ええ。スケートは、しりもちをついて骨を傷めて、びっくりしたんだけどね。でも、いつも行っていた品川のスケートリンクがなくなっちゃったんです。

井深 あ、そうなの。

盛田 今まで僕の誕生日は、毎年、朝七時半から八時半まで、スケートリンクを借り切ってスケートパーティーやっていたの。

うちの息子夫婦、孫ども、それからその友達、うちの秘書、みんな集まってきて。渡辺美佐さんとか、うちの家内の友達まで、とにかく、いろんな人がみんな現れてくれて。初めてスケートをやる人からうまい人まで、全員が一時間滑る。この前は一時間半スケートリンクを借り切ってやりました。

井深 しゃれてるね。

盛田 そうしたら、その品川のスケートリンクが、ホテルを建てるので、去年なくなっちゃった。だから、一昨年やったのが最後。

スケートでもけがしてね。ある年の誕生日のスケート会で、うちの女の子がたくさん来てて、僕は是非、いいところを見せようと思って、滑って、ずでーんと(笑い)。ひどいしりもちをついて……。

井深 尾てい骨を痛めた？

盛田 尾てい骨をもらにぼーんと打って。でも、その時はそのまま立って平気で滑っていたんです。

井深 やっぱり、痛くたって格好つけなくちゃあ(笑い)。

盛田 その時は平気だったの。それから二週間して、長野のスキー場へ来て、傷めたのが一月の終わりだったけど、二月に滑ったの。そうして三日間滑ったら、三日目にもう腰が痛くて立てなくなってね。

井深 後から響いてくる。

盛田 そう、後から響く。それでもう、“ノートルダムの鐘つき男”みたいな格好でしか歩けない。背骨が伸ばせないのね。伸ばそうと思うと、もう足を引きずっちゃって。

楽しくなければ運動じゃない！

盛田 それで、ありとあらゆる先生のところへ行行って、いろんな整体やって苦心惨たんして、それでもスキーはやめなかったの。痛い痛いと言いながら、スキーを履くと平気で滑れる。

井深 好きなスキーならば大丈夫（笑い）。ほんとうに好きなんだね。

盛田 そう。誕生日が一月二十六日ですからね、それで、結局、ほんとうに治ったのは、五月の連休が済んでから。それまでやっぱり、ずっとまっすぐ立っては歩けなかったんです。

井深 ひびが入ったとかということじゃなくても。

盛田 ひびが入ったんじゃないくて、ぼーんとやったから、尾てい骨、脊椎の下のほうを傷めちゃった。

その間ずっと、足ひきずって、初めのうちはステッキをつけて。ステッキをつけて歩くというの難しいのね。要するに、痛い時と、ところに効くようにステッキをつけばいいんだけど、なかなか。格好だけはできるんだけど（笑い）。

井深 それだけ痛かったら、両方の手にステッキをつかないといけないんじゃない？

盛田 ほんとうはね。

井深 でもそれじゃ、格好つかないから（笑い）。片一方だけじゃないんだろうからね、痛いのが。

何といっても、尾てい骨は体の中心なんだから。

盛田 それでも変な格好をしながら歩いてて。そうやって変な無理な格好しながら歩くと、今度は背骨が曲がって痛んだりして。

井深 だんだんと全身に響いてくるんだね、やっぱり。結構、やんちゃだね。

盛田 その前にも軽井沢のスキー場で靭帯を傷めた。ここには、人工でいいスキー場があるんですよ。

そこでスキーをして、片足を深い雪の中へどーんと突っ込んで、前へばつたと倒れて、左足の靭帯をやっちゃった。それで痛くて、やっぱり、しばらく足を引きずって。

ちょうどその時に、スイスのダボスで会議があって、私、チェアマンだったから、どうしても欠席できなかった。痛いのを抱えて行って、それでも、暇を盗んではスキーへ行くの。何せ会議場がスキー場の真ん中みたいな所ですからね。

さすがと思ったのは、スイスでは靭帯損傷とか足を折ったりなんかの専門のお医者さんがいるの。

井深 あ、それ専門の。やっぱりそれだけ多いんだね。なるほど。

盛田 その専門のお医者さんに診てもらった。そのお医者さん、おばさんだったけど、もう、

それ専門の人。私の足をよく診て、「あなたはスキーをしなさい」と言うんですよ。

井深 しなさいって！やめろじゃなくて。

盛田 そう。このまま使わないで大事にしてたら、かえって靭帯が伸びたままになっちゃうってね。「少しくらい痛くても平気でしなさい」って言うんです。ところが、スイスはリフトじゃ足りないくらい上まで上るから、千何メートルかケーブルカーで上るんですよ。ケーブルカーに乗るためには、スキーを担いで階段を上がらなきゃいけないんです。スキー靴を履いて階段はとても歩けないんですよ、痛くて。

井深 あれ、普通でも重いのに、とっても無理だ。

盛田 スイスのスキー・インストラクターに、前から友達がいる、いつもついてくれる。その人が「心配しないで。僕が靴を持って行ってあげるから」と。

彼が、スキー靴をリュックに入れて、スキーも持ってきて、僕は軽いスニーカーを履いて、ストックだけ持ってようやく行った。ケーブルカーでてっぺんへ上がって、そこでスキーを履いて。スキーを履くと、もう平気で滑れる。

何でもスキーやれば治っちゃう、尾てい骨も靭帯も（笑い）。だから、いかなる時も、スキーはやめずにやっていた。

ついこの間も、室内スキー場のザウスへ行って滑ってきた。オープニング・セレモニーへ行って……。

井深 ザウスって、千葉だった？全部屋内なんですかね、あれ。

盛田 そうです、幕張の手前、船橋。今や、若者は東京のすぐ近くで真夏にもスキーができる。とにかく、僕はスキーみたいに遊びのことをやると、もう夢中になって、痛いのも忘れちゃう。

井深 幅広く、いろんなスポーツやるのね。

盛田 特に、遊びのためにする運動が好きです。だから、僕はテニスをしたりするのは好きですが、ジョギングなんていうのは、全然、おもしろくないんですよ。

テニスをすれば、相手もいるし、動きもおもしろいでしょう、だからテニスは夢中でやる。やり過ぎてたくたになるほど。でも、ほんとうにジョギングというのはおもしろくないんですよ。ちょっと走ってみても、向こうへ行ったら、その分だけ帰ってこなきゃならない（笑い）。

井深 そりゃそうよ。行きっ放しじゃ困るもの（笑い）。

盛田 ジョギングで^{ハートアタック}衝心症になる人、たくさんいるんだってね。この前、「ジョギングなんていう、あんなおもしろくないことで運動はできない。僕は、意志が弱いから、運動もおもしろくなきゃ、とっても続かない」と言ったら、東京銀行の大先輩で、ご年配ながら一所懸命ジョギングしておられる方が「いや、盛田さん、あれにも結構、刺激があるもんですよ。朝、せっせと走っていると 女学生って、その人は言っている 女学生が、おじさん、頑張ると言ってくれるんですよ」と。僕はそれぐらいの楽しみじゃ、とてもだめ（笑い）。

井深 いろいろやるんだねえ。

盛田 スケートは今やめてるけど、スキー、テニス、ゴルフ。僕はインドアは全然だめなんですよ。マージャンはできないし、碁も将棋もできませんし。アウトドアスポーツなら何でもやる。

井深 活動的なほうね。でも、ジョギングはだめか.....いろいろありますな。

盛田 活動的だけれども、おもしろいもの、遊び事でないとだめなんです。

初めての言葉“ウラウラ”

井深 さあ、それじゃあ、いよいよ本題に入って.....始めるとしますか(笑い)。やっぱり、お母さんのことからかな.....。

盛田 お母さんのこと 井深さんは、うちの母と随分親しくしてくださったんですよね。

うちの母は、何がきっかけは知らないんですけど、僕の生まれる前 第一次大戦が終わったのが大正八、九年のことだから、その終わり頃から いわゆる洋楽、クラシックを蓄音機で聴くことが好きになったんだそうです。私の親父は、全く音楽は分からなかったんだけど、母は昔のクラシックのレコードをたくさん買ってまして、僕は十年生まれなんだけど、僕が生まれてからも、しょっちゅうそういうクラシックをかけてくれたんですね。

井深 お腹にいた時もだったのかしら。

盛田 どうでしょうかね。その頃は、胎教なんていう言葉を聞くこともなかったから、僕は分からないんですけども、とにかく子供の頃、僕が最初に言った言葉が「ウラウラ」だったというんですよ。昔のレコードは表と裏があるからね。片面が三分ぐらいだったでしょう。

それで、私が「ウワウワ」と言ったのは、裏をかけるということだったらしいんです。

井深 じゃ、やっぱり、お腹の中からだね、これは。「ウワウワ」と言ったんですか、最初。

盛田 と言ったらしい。とにかく、しょっちゅうそういうものを聞いていたんですね。だから.....。「ウラウラ」と言ったんだと、私はそれを母から聞いた。

先だって亡くなりましたけれど、アドルフ・ケンプというピアニスト、それから『ノミの歌』を歌って有名だったシャリアピンが来た時とか 大体、名古屋はそういう人はなかなか来ない所なんですけど 小学生から中学生まで、そういう人が来たらいつも母が連れて行ってくれましたしね。だから、クラシックに浸って育ったんですよ。それで、音楽が好きになればよかったんだけど、小学校の頃にピアノを習わせられて.....。

井深 やっぱりお稽古もしたのね。

盛田 ところが、お稽古というやつは大体、バイエルとかチェルニーとか、全く面白くないものを弾かされるでしょう。嫌で嫌でしょうがなく、結局、ピアノを弾くのをやめてしまった。それでも蓄音機でレコードを聴くのは好きで.....。

で、小学生の頃には あの頃は世の中がよかったんでしょうね。うちの近くに春洋堂というレコード屋さんがありまして、毎月あの頃は新譜と言って、新しいレコードが出るといつでも、全部うちへ置きに来るんですよ。それで、聴いてみなさいと。その中から好きなものだけ買いなさいというわけ。それでうちの母も喜んで、新譜が来るとそれをみんな聴いて、これとこれを、と言って買ったわけですよ。

昔のSPですからね、もう忘れてしまったんだけど、あれはベートーベンの『運命』誰のだったか が初めてレコードになった時にも持ってきましたね。とにかく、新しいものはいつでも聴くチャンスがあったわけです。それで、母はしょっちゅう聴いてましたし、私もそういうことで好きでした。レコード屋へ出かけて行かずにレコードが買えましたからね。暇さえあればレコードを聴いていたわけなんです。

その頃、私より幾つぐらい上だったのかな、ちょうど僕が小学校の頃に名古屋の旧制の第八高等学校の学生で、あとでSONYへ来てくれた三木守人さんの家がうちの隣だったんです。高等学校の学生だったあの人がまた、うちへ来ればレコードか幾らでも聴けるから、やって来て、これがいい、あれがいいと。学生にしてみれば、いいスポンサーがあるようなもので、うちへ来てはいろんなレコードを選んで、僕に解説してくれるわけです。その三木守人さんが、またいろいろと新しいことをよく知ってた。そして僕が中学へ入った頃に、ようやく電気蓄音機というものが入ってきましたね。

井深 うん、電蓄ね。

盛田 そう電蓄ですよ。親父は全然、音楽は分からないんだけど、三木さんが親父に、「とにかく子供にはいい音を聴かせなきゃいかん」と。彼が自分で欲しいのを、そう言って、うちの親父をだまくらかして(笑い)。うちの親父も、そうか、それなら子供にはいい音を聴かせようということで、名古屋に来た最初の電蓄を買ったんですよ。

あの頃は、電蓄なんてとっても高いもので、何百円としたんだから、まあ、ダットサン一台と同じぐらいの値段はしたようでした。RCAの電蓄でしたね。その時に最初に聴いたレコードというのを、僕は今でも忘れない。ラヴェルの『ボレロ』なんですよ。電蓄で『ボレロ』を聴いてみたら、今までの手巻きの蓄音機では聴いたことのない音が出てきたんです。それで僕はほんとうにびっくりした。

“電気”にのめり込んだ理科少年

盛田 それが中学の二年生か三年生の頃だったけど、電気を使うと、こんなにいい音が出る、ということに、ただただ、びっくりしたわけですよ。

なぜ電気を使うとこんなにいい音になるのかということが、とっても不思議でたまらなくなってきた。それから私は、中学の学業を放擲して、ラジオ狂い、電気狂いになりましたね。あの頃『無線と実験』とか『科学画報』とかいう本がありましてね。この間ちょっとそれで僕、調べただけだけど、『無線と実験』の編集長が寺澤春潮という人でしたが、と

にかく、とっても面白かった、いろんな記事が出てくるんですよ。

井深 その寺澤春潮の娘さんはSONYにいたんだからね。それも、不思議だね。

盛田 そうそう、後々になって我が社へ来て。おかつばさんの人だったけど、あの人はソニー・フランスへ行きましてね。それから結局、次はオランダへ行って、オランダ人と結婚してしまったんだ。

井深 そうだったの。

盛田 それはもう、ずっと後の話になるんだけど、ああ、寺澤春潮の娘さんかということで、とってもなつかしい気がしましたね。とにかく、その人の編集している『無線と実験』というのはとっても興味ある雑誌で、僕はそれを読みふけりましたね。それで、電気蓄音機を一所懸命、中学の時に作ったわけです。

井深 ここでつながりの発端が出てきたね、後への。

盛田 電気屋になろうと思ってた。だけど、そうやって、明けても暮れても、ラジオばかり触ってたもので、もう成績が落ちて落ちて、落第しそうに、すれすれになりましてね。中学ではいつでも落第生に近くて、うちのおふくろさんは、試験が終わると呼び出されて、しょっちゅう叱られるわけ、先生に。叱られて帰ってくると、「ラジオ遊びなんかやめなさい」って怒られるわけですよ。

井深 それは県立中学時代ですか。

盛田 そう、愛知県立第一中学。

井深 お母さんに叱られたら困ったね。

盛田 とにかく落第しそうになったんですから、仕方ない。数学と理科はよくできたんだけど、生物とか地理とか歴史というのはいつでも落第点ばかり取っててね。

井深 若い者への励みになるお話です（笑い）。

盛田 それで、僕の中学は非常に厳しくて、一年から二年になる時は、五クラスあるんですけど、一番から全員番号がつくわけ、成績の番号が。その成績順に、一番がA組の級長になって、二番がB組の級長になる。そういきまして、E組まであるわけです、五組。その次は六番が副級長になってという具合になる。それで、席の順序か成績の良い順に後ろから前に来るわけ。したがって進級する時に席が全部決まるわけです、成績で。だから、大体、どこに座っているかということで、あれはできる人かできない人が一目瞭然で分かる。僕はいつでも前から二列目ぐらいに座っててね。

井深 後ろからじゃなくてね。

盛田 後ろから二列目ぐらいなら格好いいんだけど、一番後ろの席は、最も優秀な人。

井深 一番最後の危ないのは、何組の何になるわけですか。E組の一番前？

盛田 ずーっと行って（笑い）。いずれにしても、最前列にいるのは……ね。

井深 そのクラスでは一番危ないやつ（笑い）。

盛田 僕は前から二列目ぐらいにおったんだから、いつでも二五〇人中一八〇番か一九〇番ぐらいのところだったんです。そうやって中学ずっと五年間、組が変わったわけ。だから、

中学時代の友達に会うと、僕は常に前から二列目ぐらいだったから、大変な劣等生の仲間だとみんな思っているわけです。そういう中学でしてね。落第しそうになって、最前列へ行ったら、その次は落第が待っている。落第してきた人は、そのまた先のほうにいますけれどね。

井深 呼び出されて帰ったら、お母さんは何て？

盛田 先生は、もっとうちで勉強させてくださいと怒るわけ。そうするとその分、僕はお風呂さんにさんざん油を絞られて。一遍はもう、僕の勉強しないのは電気遊びのせいだから、その電気の遊び道具をみんなしまえ、と言って怒られたりしたんですけれども。

ちょうどその頃、僕が中学の四年生か五年生の時に、井深さん、覚えてる？NHKでテレフンケンのだったかと思うんだけど、スチールベルトのマグネットレコーダーを輸入したんです。あれ、記念すべきものだから愛宕山には残っているかもしれませんね。そのマグネットレコーダーの写真が、『無線と実験』の表紙に出たんですよ。それで僕は、磁気録音機というものがあるということを知って、今度はひたすら磁気録音機の本を読んで勉強した。

井深 そのNHKで買ったのは、ワイヤーなの？

盛田 要するに鋼鉄のベルト、ワイヤーじゃなくて。ところがそれがきっかけでいろいろ、磁気録音機のことを勉強したら、ワイヤーレコーダーという針金のレコーダーがあるということを知ったわけです。そこで、どうしてもワイヤーレコーダーを作ろうと思った。ピアノ線を買ってきて、それでヘッドを苦心して巻いて……今から考えると、あんなものが入るはずがなかった。ヘッドのギャップなんかはものすごく大きかったわけですよ、僕の作ったのは。

次は、蓄音機のゼンマイを使って……でも結局、それは一所懸命やったんだけど、磁気録音機はうちではできなかったわけです。

NHKで買った、あの磁気録音機、テレフンケンだったと思うんですけど。井深さん覚えてませんか？

井深 多分、マルコニーじゃないかな。

盛田 ああ、マルコニーかも。僕もちょっとそこら辺のところはあんまりはつきりとは……。

その時の磁気録音機は失敗したけど、後で井深さんと、日本で最初の磁気録音機を作ったんですからね、非常に面白い因縁だと思う。僕は中学の時にはそんなことになるなんて夢にも思わず、ひたすら一所懸命作っていたわけ。

つづく

井深対談

因縁に導かれるように……（２）

ゲスト：盛田 昭夫

盛田 昭夫（もりた・あきお）

1921年愛知県生まれ。1944年、大阪大学物理学部物理学科を卒業と同時に海軍に入り、技術中尉で終戦。

1946年、井深大氏とソニーの前身、東京通信工業を設立。

1971年、社長、1976年会長となり現在に至る。この間、モルガン銀行国際諮問委員ほか、欧米企業の顧問や、日米賢人会、日米経済諮問委員会のメンバーとしても活躍。日本きっての国際派経営者として、現在、経団連副会長。

1982年、英国王立芸術協会から日本人として初の、アルバート・メダル、そして1993年には、英国の産業振興と輸出促進への貢献により、名誉大英勲章を受章している。著書に『学歴無用論』『新実力主義』『MADE IN JAPAN』などがある。（財）幼児開発協会理事。

昔から知っていた井深さん

盛田 中学生（旧制）時代には、『無線と実験』と、もう一つ『科学画報』という雑誌がありまして、『科学画報』にはいろんな新しい発明が出ていた。それで多分、井深さんの“走るネオン”の発明を知ったのも『科学画報』だったと思うんだけどね。早稲田の学生が“走るネオン”というのを発明したというのを、僕はちゃんと覚えているんだから（笑い）。

だから、詳しいことは後に知ったんだけど、島茂雄さんという井深さんの一番古い通信友達の人と井深さんと、早稲田大学時代に、何とかいう名前を忘れちゃったんだけど、神宮外苑に据えつけるエキスポーネンシャルの巨大な拡声器をつくったんですよね。それも覚えている。

僕はちゃんとそういうことは、新しくそんなことをしている人がいるんだなと思って覚えていたし、その井深さんという学生の人が、“走るネオン”を発明したというのがね、とても印象に強く残ったんです。井深さんという名前はそのうち忘れちゃったんだけど、不思議な人がいるなと思って、“走るネオン”というのはずっと覚えていた。考えると、井深さんと僕の因縁というのは何か不思議だけど、もうその頃からあったんですね。

井深 ふーん、そうなんだね、そういう感じがしますね。

盛田 それで私は、造り酒屋の息子、それも長男ですけれども、どうしても電気とか科学を勉強したいと思って、旧制高等学校の八高を受けた。昔の高等学校は理科と文科と二つしかなかったですからね、そのどちらかを選ぶ。

私は理科へ入ったわけです。旧制の高等学校というのは三年制ですから、三年たったら今度は大学へ行かなきゃいけない。となると、大学では何をやるかということを考えなきゃいけない。

私はやっぱり、何か物をつくるのがおもしろいと思っていたから、そういう仕事をやりたい。そして物をつくるなら大きいものを一番大きいものだと思っただけで、初めは造船をやろうかと思ったんです。そこで、造船のことについていろいろ本を読んでみたんだけど、船というのはでかいけれども、中はがらんどろですだからね（笑い）。

だから、もうちょっと中身もちゃんと詰まっているのをやろうと思って、いろいろやっている間に、やっぱり科学なら物理を勉強しようと思ったんです。

それと、物理へ行こうと思ったもう一つの大きい原因は、私の高等学校の時の物理学の先生で、服部学順先生という方が素晴らしい先生だったんですよ。私は、それ以外は嫌いで全然だめだったけど、物理とか数学とかいうのだけはよくできたんですね、好きだから自分でも一生懸命勉強したし。

その服部先生に、私はやっぱり物理へ行こうと思う、という相談をしました。それで、物理へ行くなら東京大学を受けるか、京都大学へ行くなかと思って考えてたら、服部先生が、物理でもどういう物理をやりたいのかと。私は、物をつくることに関係したようなこと今でいう応用物理学 その頃は応用物理という言葉はなかったんですけども、まあ

それに近いようなことをやりたいという話をしたら、その先生がそれは応用物理学と言うんだと。

応用物理学をやりたいのなら、自分の東大の同級生で素晴らしい先生がいる。浅田常三郎というその先生は大阪大学にいらっしゃるから、まず浅田先生のところへ会いに行きなさいと言われた。それで、私は高等学校三年の時に、服部先生の紹介で大阪大学の浅田先生に会いに行ってきた。

大学を見せてもらったら、浅田先生がもうほんとうに、くまなく自分の研究室を見せてくださった。そのお人柄にすっかり私は惚れ込んで、どうしても浅田先生のところにつくんだというつもりで、他の大学なんかすっぱり思い切って、大阪大学の物理に行ったわけですよ。

ところが後で聞くと、またその浅田先生は井深さんとは非常に奇縁があるんですね。

井深 そうなんだよね。日本測定器時代、海軍と磁気探知機の研究をやっていた時のメンバーとして知ってた……。

盛田 浅田先生は海軍の研究をやっておられましたからね。だからその時は、井深さんは井深さんで、浅田先生をよく知っていて、僕は僕で、浅田研究室にいて……。

戦争はもう旗色が悪くなってきていたから、軍としては新兵器を開発して対抗しなければならなかったわけです。だから、戦時科学技術研究会というのを軍・民間一体でつくった。その研究会には、当時の日本の最先端の技術者が集められていたと言えるでしょう。

その磁気探知機というのは、例えば海の中に潜っている潜水艦をどうしたら見つけれられるか、それを探る機械。潜水艦は鉄の塊ですからね、潜水艦がいると、要するに、地球の磁場が変わるわけ。で、飛行機に磁気探知機をつけて、その飛行機がずっと飛んでいくと、潜水艦がいれば、磁場が動いているわけだから、その磁場の変化で潜水艦がこの下にいるということが分かるわけです。

そのためには、非常に少ない磁場の変化を感知しなきゃいけないのでね。そのための器具を、井深さんは日本測定器で開発していたんですね。いわゆる直流増幅器といって、もうとっても感度のいい増幅器を飛行機にぶら下げて積みますから、その感度をさらによくするために、直流を交流に直すための周波数選択継電器という器具を井深さんが開発したんですね。

井深さんはそれをさらに発展、応用するための研究をやって、私の先生の浅田先生もその開発に協力をして、という関係ですね。

物理学から海軍へ

盛田 そういうわけで、僕は阪大の物理に入って、浅田先生に随分かわいがっていただいたので、大学の二年ぐらいの時から浅田先生が海軍の仕事を手伝えということで、浅田研究室の中でやっている海軍の仕事を手伝っていたわけ。したがって、海軍の軍人さんもたくさ

ん来てまして、そこで、海軍の技術将校と自然にたくさん友達になったんです。

そうしたら、技術将校が、あんたは海軍に永久服役したらいいと。短期現役と永久服役というのがありまして、永久服役というのは、要するに海軍へ就職することなんです。その技術将校の話だと、海軍には委託学生制度というのがあって、海軍に入っても、ちゃんと大学は卒業できるようになっていると……。要するに、私は海軍に就職する試験を受けたらいいと言われたんですよ。

井深 何か服役って……刑務所の服役と同じですか。

盛田 永久に海軍へ勤めるといって 全くの職業軍人になるということなんです。だから、その試験を受けなさいと。

井深 永久服役ともう一つは何ですって？

盛田 短期現役。普通の場合は徴兵で、大学で理科をやったような技術をする人は、主計（注・会計関係を司る係）の人もそうですけれどね、短期現役と言って、戦争がない時なら二年間という、短期の兵役だったんですよ。戦争になったから、ずっと続くようになったけれど。それと永久服役。その三つのどれかに行くことになるから……。

あの頃ちょうど、日本海軍が戦争中、慌てて初めてレーダー 電波探知機と言ったんですけれど をつくったんです。そして軍艦へ、そのレーダーを乗せ始めて、我々みたいにエレクトロニクスをやっている人は短期現役だと、みんな軍艦のレーダーを動かす係として乗せられて第一線へ出されるわけ。

その海軍の将校が来て、あんたは短期現役になったら必ず前線へやられるから、今のうちに就職しなさいと、海軍へ。そうしたら、今、もう海軍の航空技術^{しょう}廠の仕事をしているんだから、それを受けるなら、こちらから指名で航空技術廠に引っ張ってやると言われた。

それで、僕は大学の二年生の時に、その試験を受けた。試験が受かりますと、今度は海軍から給料をくれるんですよ、海軍の委託学生として。学生服の襟に錨の徽章をつけて、あの頃で三十円を毎月くれるわけ。今考えられない金額 三十円って大変なお金ですからね。みんなの普通の給料が八十円ぐらいの時に、学生に三十円くれる。僕はそれでレコードを買いまくった（笑い）。

井深 何かうそみたいな話。しかも結果として、ソニーの盛田になっちゃったんだから。

盛田 あの頃もう洋楽なんかをかけたらか叱られるんですけど、幸いにも我々の物理学の研究室というのは軍の研究をやってますから、誰もよその人、入れませんからね。そこへ手巻きの蓄音機を持ち込んで、僕の相棒と。またそこで不思議、その相棒^{しょう}の兄貴が、それも後で分かったんだけど、井深さんの友達だったんですよ。

僕と同じ部屋で研究してて、一緒に物理をやって、レコードを聞いたその親友、もう亡くなってしまいましたけれどね。おかしいことがいろいろありましたよ。

またそいつがおもしろいやつでした、全く。あの頃で言ったら軟派の最たるもので、フランス語が好きで、シャンソンが好きで……二人で夜中になってから大学へ行って、みんなが寝静まった頃に、二人で泊まり込んで、いろんなレコードを聞くんですよ。特に、ア

アメリカのアンドレ・コステラネッツという指揮者のレコードが好きで、たくさん買ってきて、それを聞いた。

戦後、本物のコステラネッツに会った時、「私は戦争中、爆撃のある時に、大学でこっそりあなたのレコードを聞いていた」と言ったら、彼、感激して、「そうか、その頃からおれを聞いてくれたか」と言っていた。

今考えると、ほんとうにいろんなところに井深さんとのつながりがあった。井深さんと仕事をするようになってからいろいろ話したら、その親友の兄貴だって、井深さんと早稲田時代の友人だと分かった……。

井深 寮の友愛学舎で一緒だったんです。あれも不思議な縁だったね。

盛田 そうそう友愛学舎。とにかく、私と井深さんとのつながりは因縁みたい。それで私は、結局、さっき言ったように物理をやったために、海軍へ永久服役で就職をした。大学を卒業すると、自動的に本格的な職業軍人ということで、四カ月間だけはむちゃくちゃに訓練されますけれど、すぐ中尉になるわけですよ。

技術中尉になって、軍服を着て、海軍航空技術廠というところに配属になった。

井深 それまではよかった。

盛田 それで、航空技術廠の中に光熱兵器部というのがありまして、そこでやらされたのが熱線探知機の研究。その頃、熱線探知というのは非常に大きな日本のプロジェクトでして、㊦と言ったんだけど。みんなマルケ、マルケって言ってたけど、暗号ですからね。でも、何でケだったのかな（笑い）。

井深さんとの出会い

盛田 マルケは、日本としても大プロジェクトだから、陸軍も海軍も学者も、それから民間のいろんな会社の技術者もみんな集まって、戦時科学技術研究会の中のマルケの部会に組み込まれた。それで海軍から私はそこへ出されたわけ。そしたら、今度は井深さんがそのメンバーだったんですね。

いろんな方がおられたけど、例えば、そこには文理大（現・筑波大）の藤岡由夫先生もいらっしやった。僕たちは、学生の頃、藤岡先生なんて、神様だと思っていた先生ですよ。

そこで私は井深さんと一緒になったわけです。その頃は、もう食糧事情はとても悪いですし、大学の先生や民間人はとても困っていましたから、その戦時科学技術研究会の会議というのは、大体、東京を離れて温泉みたいな所で、みんな泊まり込みでやるんですよ。

井深 だって、熱線探知機の研究だから温泉でやったんじゃないの？（笑い）

盛田 たまには東京で会議をやったこともありますけどね。そうそう、今は光電工業という、メディカル・エレクトロニクスをやっている会社の会長さんも陸軍のメンバーでしたよね。いろいろおもしろい人がおりましたね、で、その委員会へ出て、いろんなことをしている間に、井深さんと話すようになった。夜も泊まり込みですからね。ですから、夜ずっと話

しているうちに、すっかり気が合いましたね。

井深 でもその時の最初の印象って覚えてる？

盛田 それがあんまり覚えてないんだな。井深さん、覚えてますかね。まだ学校を出たばかりの二十三か四……、井深さんとは十三違いですからね、井深さんが三十五、六。

井深 随分な美少年だったよ。美青年と美少年の出会いだった（笑い）

盛田 いや、会の中ではわりに若いほうですからね。何となく気が合って、ねえ。会議が終われば、夜はみんな酒を飲んで寝る。海軍がブドウ酒を持ってたから、それで……。要するに、お酒類は陸海軍が供給するわけですよ。世の中には、もうお酒がなかったのね。だから、大学の先生やいわゆる民間人は喜んで来るわけ。

もう終戦が近くなった頃に、身延山の温泉へ泊まって、会議が終わって、身延から井深さんと一緒に汽車に乗って、富士宮へ行きまして、富士宮で別れて、僕はそれから逗子の研究所へ帰った。そして井深さんは、その時に清水のほうへ行かれた。

井深 そう。由比に私の叔父がいたから、富士宮から清水のほうに行った。

盛田 そうして、私が逗子へ帰ったら、ちょうど清水が艦砲射撃でやられた。もうその頃は、アメリカの軍艦が目に見える所どころか、大砲を打てば届く所まで来て、清水の町が艦砲射撃された。それで、井深さん、大丈夫かなと心配してたら、井深さんの汽車はトンネルの中に入ったんで、助かったんでしたよね。

井深 そう、汽車に乗ったまま、一日じゅうトンネルごもり（笑い）

盛田 また、その艦砲射撃がものすごくうまくて、ばんばん当たる。それで清水の町がやられたわけ。井深さんの乗った汽車だって、外なら大変だったけど、まことに運よく、トンネルの中に入っていれば安全ですからね。トンネルの中に入ったまま、出るに出られず一日じゅう。その話は後で聞いたんだけど、僕は逗子の海軍の研究所へ帰ったから、情報だけはすぐ入りましたからね。あの清水が艦砲射撃でやられた時には、トンネルごもりしたとは露知らず、ひどく心配してた。

それからまた私は、日本測定器が疎開していた長野県の須坂へちよくちよく行った。

井深さんの所で、さっきの増幅器の開発をやってもらっていたから、出張でよく井深さんの所へ……。

井深 そうか。わりとよく会っていたんだ。それが昭和十九年（一九四四年）頃？

盛田 ええ、それで須坂へ行って、泊まって……。井深さんと、こんな戦争もう終わりになる、という話をしていたわけ。

その頃、井深さんの所の仕事と、名古屋に近い瑞浪^{みずなみ}という所辺りに三菱電機の工場がありまして、三菱電機にも何か海軍の仕事を頼んでいて私はそちらにも回る。それで私は、昭和二十年（一九四五年）終戦の二日前の八月十三日にも三菱電機へ出張したわけです。

そこまで行ったついでに、名古屋大学へも寄って、それから、父たち家族が疎開していた知多半島^{こすがや}の小鈴谷という所に行った。

当時、私は海軍中尉として、内務士官という庶務課長みたいなことをやりました。庶

務という仕事は、何でも仕切って仕事がうまく進むようにしなきゃいけない役目です。戦争がだんだん負けそうになってきましたから、私はその前に何とかと思って、私の上の人たちに一遍、自分の家へ出張という名目でみんな帰ってもらったんです。だから私が最後になった。

いよいよ戦争はもうだめになったから、名古屋へ行った時についでに家へ寄って、親の顔だけ見てこようと思って、名古屋から回って、十四日の夜、田舎へ着いた。そうしたら親父がとても喜んで、とにかく一杯飲もうというわけ。親父と一緒に酒を飲んで、僕は酒を飲むと眠くなるもので、もういい気持ちになって寝たんです、それが八月十四日の晩。そして、ぐっすり寝たら、朝、おふくろが来て、何か天皇陛下の放送があるらしい、ちょっと起きろとせかす。これはえらいことになるなど。

やっぱり、そうなったら海軍軍人ですから、天皇陛下のお言葉を聞くのに、いいかげんに聞いたらいかんと思って、ちゃんと軍服を着まして、ラジオの前に直立不動、天皇陛下のお声を聞いたんです。そうしたら、ガーガーガー言っているんだけど、何だかよく聞こえなくて分からない。でも、負けたらしいということは分かった。

八月十二日の朝、逗子を出発したんだけど、出かける前に「僕はちょっと出張してきますけれど、帰ってくるのは十五日か十六日になるでしょう。僕が出張している間に戦争が終わるかもしれません。終わったらもう帰ってきませんからね」と、まあ、捨てぜりふを言ったんです。そうしたら上官が怒りまして、「盛田中尉、帰ってこなかったら戦時逃亡罪だ。おまえは軍事裁判にかけられる」って。「いや、そうなったらもう、戦時逃亡罪じゃないでしょう。負けたら戦争は終わるわけだから、私は帰ってきませんからね」って言ったんですよ。でもまさか、ほんとうに、私のいない間に終戦になるとは思わないから、朝飯の時に士官の食堂でそう言って出た。

終戦の日の夜行列車

井深 随分、そこはいいところだったね。そんなことをよそで言ったら大変なことになる。

盛田 そんなわけで、ちょうど故郷の小鈴谷にいた十五日の昼、天皇陛下の放送があった。これはえらいことになった。私のところで徴用の形で働いてくれている一高の理科の学生とか、女の子とかたくさんいるわけですよ。私は内務士官で、さっき言ったように庶務課長ですから、その責任者として、あの人たちをどうかしてやらなきゃいけないと思って、天皇陛下のお声を聞いたその途端に、やっぱり帰らなきゃいかんと思ったわけ。

そして多分、戦争が終わったら汽車なんか全部止まると思ったから、おふくろに、僕は歩いてでも逗子まで帰るから三日分ぐらい食糧を用意してくれって。うちは造り酒屋なものですからお米はある。三日分ぐらいのおむすびをつくってもらって、それを持って、武豊^{たけとよ}という駅まで自転車で出て、そこから汽車に乗って名古屋駅まで出ました。

戦争が終わって、ほんとうに大混乱状態になると予想して、駅へ行ってみたら、しーん

として誰もいないわけですよ。軍人だから、海軍の将校の証明書を出せば切符はすぐ買えて、しかも二等の切符を買えましたからね。それが十五日の夜の八時頃 名古屋駅にも汽車がちゃんと時間どおりに来たんですよ。

井深 そうだったんですかね。終戦の当日のそんな話、珍しいねえ。

盛田 それで乗ってみたら、乗っている人もほとんどいない。だから悠々と座れてね。確かに、終戦のその日に、そのことを知った上で、汽車に乗った人はあんまりないんだろうけれど……。

夜行に乗って、朝六時頃、ちゃんと大船へ着いた。それで乗りかえて七時か七時半頃、逗子のオフィスへ帰りつきました。そうしたら、「何だ、おまえ帰ってきたのか。おまえは逃げるはずだったんじゃないか」って（笑い）。「いや、やっぱり、私は責任者だから帰ってきました」と。でも今度は、三日分のおむすびがあり過ぎて困っちゃったわけ（笑い）。

井深 だけど、海軍のそういうところにおいても、十五日の朝まで玉音放送があるってことは分からなかったんだね。

盛田 いや、全然知らなかった。

井深 私は岳父の前田多門に聞いていたので、もう負けるということは分かっていた。ソ連を仲裁に使おうとしているとかいうこともね。でも、それがいつということまでは分からなかった。まあ今となっては、終戦の秘話だね。

盛田 前田多門さんは近衛公にも近い方だったから、だんだん負けているという戦局の実態は、わりと早くから井深さんはよく分かっておられた。

しかし、いつかということとは分からない。我々にしても、勝ち目はないと思っても……いつかということとは。でももう、負けそうだったから……。

井深 予測がこれ以上ないくらいびたりだったわけね。

盛田 いや、それよりも、逗子のすぐ近くが三浦半島でしょう。三浦半島は海軍の本拠ですからね、もし負けても、あそこへ立てこもると思った。それでフィリピンのバターン半島で、マッカーサーが最後まで頑張ったように、日本海軍もあそこだけは頑張ると思ったんですよ。

その真っ只中に私はいるんだから、もし負けたら、これはもう絶対だめ、助からないと思ったんです。ですから、親の顔を一目見に、みんな帰ってもらった。幸か不幸か、僕が最後だった。ただ直感的に十二日に出発する時に、私の出張中に終わるかもしれませんと言っただけで、その時は冗談で言ったんですよ。でも冗談でも、その頃、そんなことを言う軍人はすごい叱られたわけ。

井深 叱られるじゃすまない。捕まっちゃったでしょう。

盛田 いや、外で言えばね。海軍の中だったから、「おまえはばかだ」と言って叱られるだけなんです。

井深 でも、それだけ海軍って自由だったのね。陸軍だったら、ただじゃすまなかったね。

盛田 わりにね。まあ、技術屋ばかりの所でしたしね。だけど、やっぱり、ほんとうに負けた

ら、私は責任者だから帰らなきゃいけない。そして、負けてから井深さん、逗子へ来てくれた。そういう気がする。

僕は九月十何日まで逗子にいましたからね。負ける前にも、もし何かあったら、どこへ行くかと言って、私は小鈴谷の家の住所を井深さんに伝えてあった。

井深 そうか。そんなによく会ってたんだね。

盛田 負ける前から、井深さんももうじき終わりそうだと思っていたし、僕も終わりそうだと思っていたから、井深さんが、もし終わったらどうなるかという話をよくしたでしょう。私は、もし無事に帰れたら、ここにいますよ、という住所を渡したんですよ。

第一、負けた経験がないんだから、旗色が悪いのは分かっていたって、どういう形で終わるかということは皆目分からなかったし。

それで僕は田舎へ帰って、これは酒屋の跡継ぎになるよりしようがないと思っていたら、朝日新聞の「青鉛筆」に、井深さんが東京通信研究所というのを始めるという記事が出たわけですよ。十月の何日かよ。ちゃんとあれは取ってあるけど。

私はそれを見て、井深さんにすぐ手紙を出したわけ。

井深 あの「青鉛筆」でいろんな人との連絡がとれた。あれは今も続いている名物のコラムだよな。

盛田 嘉治隆一さんという人が書いた細長い記事でした。

井深 それからまたあらためて、今に続く関係になった（笑い）。

つづく

井深対談

因縁に導かれるように……（3）

ゲスト：盛田 昭夫

盛田 昭夫（もりた・あきお）

1921年愛知県生まれ。1944年、大阪大学物理学部物理学科を卒業と同時に海軍に入り、技術中尉で終戦。

1946年、井深大氏とソニーの前身、東京通信工業を設立。

1971年、社長、1976年会長となり現在に至る。この間、モルガン銀行国際諮問委員ほか、欧米企業の顧問や、日米賢人会、日米経済諮問委員会のメンバーとしても活躍。日本きっての国際派経営者として、現在、経団連副会長。

1982年、英国王立芸術協会から日本人として初の、アルバート・メダル、そして1993年には、英国の産業振興と輸出促進への貢献により、名誉大英勲章を受章している。著書に『学歴無用論』『新実力主義』『MADE IN JAPAN』などがある。（財）幼児開発協会理事。

大学から東京通信工業（株）へ

盛田 昭和二十年十月に東京通信研究所を井深さんがつくって、その仕事がすぐ“青鉛筆”で紹介されたんだから……。

それとちょうど同じ頃に、さっきの旧制高等学校で好きだった物理の服部先生が、東京工業大学の救援になられていました。戦争が終わって、若者がみんな帰ってくるので、東京工大の中に専門部というのができた、そこで物理学を教える人がいないから、私に服部先生から、講師に來いと言って手紙が來て。

井深さんに会いたいのと東京工大のほうの用事と、その両方で、僕は東京へ出てきました。当時のこととて、泊まる場所もないから、後でSONYの社長になった岩間和夫の家に泊めてもらってね。岩間というのは、名古屋で隣同士でしたから。

井深 あとで義弟^{おとうと}さんにもなった岩間さんだね。

盛田 そうそう、私の妹と結婚しましたから。もともと盛田家の本拠は愛知県知多半島の、さつき疎開したと話した小鈴谷^{こすがや}なんだけど、私の父の代に名古屋へ出て、私は名古屋生まれです。その名古屋で、岩間家とうちとは隣同士なんです。だから、小学校の時からずっと一緒に育った幼馴染みです。それで、岩間の家に泊めてもらって、で、井深さんのところに行ったり、東京工大の先生をしたり。

井深 海軍に入りたいいきさつもそうだけど、話を聞いていると、人と人のネットワークが自然に身の周りにできて……。

盛田 そうなんです。そういうわけで、東京工大の先生をしていたんだけど、そのうち新聞記事が出まして、職業軍人だった者は教職に適さないから追放だ、ということで。

井深 パージというやつね。

盛田 そうそう、追放ですよ。公職追放令。僕は海軍に永久服役で就職したんですから、まさにひっかかるわけです。

それを機に、東京工大の先生をやめたんですよ。それで、井深さんのところを手伝うことに……いや、それが本職になった。

井深 むちゃくちゃな会社を、それはもう大胆に、よくまあ……。

盛田 自分でつくっておいて、むちゃくちゃだなんて（笑い）。

いよいよ昭和二十一年に、東京通信研究所から東京通信工業株式会社ができたものから、私はそれに専念する気になった。私は酒屋の長男ですから、やっぱり、その長男が家業をやめて、他の仕事をするというのには、一応、親父を口説かなきゃいけない。それで井深さんが、前田多門さんと一緒に、どうしてもちゃんと親父のところまでもらい下げに來てくださるというので（笑い）。

井深 それはもう、代々続いた酒造業を継ぐべき長男として非常に大事な立場の人なんだから……。それで、何としても口説くと決死の覚悟。

盛田 だから、前田さんまでわざわざ小鈴谷まで來てくださってね。

井深　そして何回も拝んじやった。拝み倒しというやつ(笑い)。それで、よっしゃと言ってもらった。

でも、考えるとそれはえらいことでしたね。今だって、代々長男に引き継ぐ家業ってあるでしょう。特に酒造業などという大がかりな家業はほかの人にちょっと頼むというわけにはいかないんだから。

盛田　家は弟が継いでいくからと言ってくれましたからね。

井深　それにしても、家と長男の関係が特別だったあの時代では、随分変則的なことだったから、大変な協力を家中でしてくださった……。

盛田　それに、うちの親父はあんまり東京通信工業を信用してなくて井深さんに「もしつぶれたら、うちで食わしてあげるから、ここへ来なさい。そして、うちへ就職しなさい」って言ったんですよ(笑い)。

井深　なんてたって、そういう古い家なんだもの。

盛田　もう、来年か再来年で三百五十年になる家ですから。

井深　じゃ、そういう旧家の、しかも昔の家庭のきっちりした長男の育て方というのを、少し話してください。

盛田　うちの親父はわりにリベラルでしたよ。子供の時から好きなことをさせてもらってましたしね。大体、盛田家というのはわりに歴代リベラルで、私の祖父の祖父という人は、明治の初めに、もう酒だけをやってはいけないというので、これからはブドウ酒をつくると言い出しまして。

井深　本格的なワインですか。

盛田　ええ。だから、それが計画通りうまくいってれば、今はサントリーよりよっぽど大きくなっていたかもしれない……。

明治の初年にブドウ酒をつくると言って、知多半島の小鈴谷というあんな田舎の人だったんだけど、東京まで出てきまして、福沢諭吉先生にいろいろご相談した。

先だって、福沢先生と私の祖父の祖父との往復の手紙が出てきました。慶応に福沢研究所というのがありますので、この間、それを持って行きましたら、その中の一つの手紙が、今、まだ見つかってないというわけで、いろんなことを調べてましたら、そのじいさんの日記が出てきました。

その日記を見ると、福沢家へ行った日にちが出てきた。それで、詳しい日付はちょっと今、覚えてないんですけど、明治何年の何月何日に東京で福沢先生のところを訪問したと書いてある。そのじいさんは盛田命祺という名前だったんですけども、命祺から新しい酒のつくり方を教わって酒を改良した、と『時事小言』という福沢先生の本に、私のじいさんの名前を出して、ちゃんと書いてあるんです。

井深　おじいさんのおじいさんは何て呼ぶのかしら。大おじいさん？古いおじいさんだから(笑い)。

盛田　そのじいさんは十一代目。僕は十五代目ですから、大おじいさんのもう一つ上、大大お

じいさん（笑い）。私の祖父の祖父ですからね。現役時代は久左工門でしたけれど、久左工門を譲ってからは、盛田命祺と言いまして。

井深 襲名だものね、盛田家は。

盛田 それでいくと、私も久左工門、襲名と言うんですかね。とにかく命祺と言いましたが。福沢先生がその祖父宛にくださった手紙には、命祺の祺のしめす偏がころも偏で書いてあるんですよ。ころも偏がほんとうか、しめす偏がほんとうかって、この間、福沢研究所で大変な問題になった。結局は福沢先生が間違えたという、傑作なことになっているんですけどね。

モダン思考の家系

盛田 そんなわけで、盛田家はその頃から新しいものか好きで……。明治の初めの頃に、フランスから人を呼びましてブドウ酒の研究をしたんだそうです。

まず、フランスから苗を入れて、ブドウをつくり始めた。そうしたら、その苗に何とかいう、しらみのような小さい虫がついてたんですね。その虫のせいで、フランス種のブドウというのが世界中で全滅した、という生命とりの虫がついていた。だから、今のフランスのブドウというのは、全部カリフォルニアのブドウなんですよ。フランス種は、その何とかという虫に弱くて。ついに全滅したんです。それでカリフォルニアのブドウをフランスへ持って行って接ぎ木した。それは非常にその虫に強いんですね。

今、カリフォルニア・ワインはまるでフランスのワインより悪いようなことを言われるけど、フランスのワインだって、先祖は全部カリフォルニア産なんだから……。

だけど、うちの大大じいさんは、結局、その虫がうつって、せっかく開墾して植えたものが全部だめになって大損をしたわけです。

しかし、その頃はカリフォルニアからまたブドウの苗木を移してなんていう知恵はわからないから、日本のブドウ酒は全部材料がだめになって夢もつぶれた。

井深 じゃ、それが成功していれば、もうちょっと早く日本産のワインができてたかも分らないんですね、ほんとうは。

盛田 また、そのじいさんは非常に新しいものが好きで、品川弥二郎とか、井上馨とか、あの頃の偉い人と非常に親交がありましてね。

井深 そりゃあ明治維新だね。

盛田 そうそう明治維新の、明治十何年のことだから……。それで、知多半島の、あんな不便なところまで、井上馨さんとか品川弥二郎さんなんかやっ来て、家に泊まっていかれてね。そういう人たちの書いたものがたくさんあるんですよ。何でも新しいことが好きでしてね。

井深 遊ぶのも好きだったのかしら。品川弥二郎さんとかって、小説で読むと随分悪い遊びもした人物だったみたいだけど（笑い）。

盛田 うちのじいさんはわりにまじめだったようですよ。私財を投じて、小鈴谷の道路をつくったり、公益的ないろんなことをして、それで藍綬褒章をいただいたんですよ。

その藍綬褒章が、今、盛田家の資料館にありますけれど、私たちのいただいた藍綬褒章と、全く同じものです。年号が書いてあるでしょう、あれが明治十四年になったり。十七年になったり、違うだけ。箱が今よりちょっと上等だったかもしれんけれど（笑い）。

井深 当然、リボンも同じね。

盛田 リボンも同じ。しかし、あの頃、藍綬褒章をいただくというのは今よりずっと大変なことだったらしい。

井深 勲章というものの持つ値打ちというか、重みが全然違ったでしょうし、民間でもらうということはまずなかったんじゃないかしら。

盛田 昔はお役人でないと。井深さんのおじいさんやなんかは、お役人だったから、ちゃんと勲章をもらわれたでしょうけど、民間では珍しいらしい。だから、今の小鈴谷の道というのは、そもそもうちのそのじいさんが村のためにつくった道。それで、亡くなりましてから、村の人たちがみんな集まって銅像をつくってくれましてね。

それは戦争中、金属供出までずっとありましたよ。今は胸像になっていますが、とにかく最初のは大正何年かにできたんですよ。東芝の岩田式夫さん 岩田さんというのは先だって亡くなった、東芝の会長だった方ですけども、うちの隣村の生まれなんですよ。その方が小学生の時に、その銅像のできたお祝いの旗行列があったんだそうです。それで「あなたのところのおじいさんの銅像のできたお祝いに、近隣みんな、私も小学生で駆け出されたんだよ」って、言っておられた。

まあ、銅像ができたぐらいだから、やっぱり、村のためには一生懸命尽くしたんでしょうよ。

命祺はそういう偉いじいさんだったけれど、問題はその後と次の代ね（笑い）。というのは、私の大じいさんと私のじいさんの時代 今度はどうも多少遊んだようです。遊びというよりも、絵がうまくて、今でもその人の描いた絵がたくさん残っています。

十四代目の苦勞

井深 フランスまで絵の勉強に行かれた人があったと聞いたことがあるけど、その人？

盛田 いや、フランスへ行ったのはまたその次の代なんですよ。曾祖父にあたる、命祺の次の十二代目は日本画を描いてまして。その上、骨とうが好きで……。これは日本で最大の骨とう屋と言われた大阪の山中という店の上得意。山中骨とう店というのは、ニューヨークまで進出したような店ですからね。それは私のじいさん（十三代目）もそうだったんですけども、その山中の大変なお得意になりまして、財産を山中にみんな注ぎ込んだんじゃないかと思うぐらい骨とうを買ったんですよ。

ここで話はちょっと変わりますか、井深さんと一緒に、昔、小林一三さんのところへ行

ったでしょう。東通工で、最初のテープレコーダーができた時に、井深さんと関西まで行って……。

井深 そうそう、宝塚の、そして東宝映画の小林さん。

盛田 そう、宝塚の小林一三さんのところへ、テープレコーダーを見せに行ったでしょう。そして、小林さんのしゃべっているところを僕はテープレコーダーへ入れたわけ。それを再生して聞かせたら、小林一三さんが、「世の中には、おれと同じことを言うやつがある」なんて言うわけ（笑い）。

その当時、自分の声が入ってるなんて思ってもみないわけですよ。「いや、そうじゃないですよ、今、あなたのお話しになったのが、そのまま録音されて、ここから出てくるんですよ」って。

井深 小林一三さんという人もたいした人だった。

盛田 ええ、小林一三さんが非常に偉いと思うのは、多分、あの時に初めてテープレコーダーを見たんですが、それからずっとテープレコーダーのことを考えておられたこと。

井深さんが後でステレオをつくった時に、今度はソニーへ自分から見えて。ちゃんとステレオのテープレコーダーを聞かれた。そして、これを使えばオーケストラなしで劇場ができると言って、その小林さんのアイデアでつくったのがコマ劇場です、新宿の。

だから、あの劇場は、丸い舞台でオーケストラボックスがないんですよ。ステレオのテープレコーダーを使って、オーケストラなしで劇場をやろうというのを、そういう形で実現した。

小林さんは、あの時に初めて、自分の声が入るといことが分かったら、それをもうちゃんと覚えていて活かしたんですね。初めての時から、そのことをずっと見てきて、自分の仕事の形にするというのは、やっぱり偉いね。

そこで、さっきのおじいさんの話につながるんですが……その時に、小林一三さんに私の名刺を出したら、盛田という字を見て、「君は、盛田久左工門という人とかかわりがあるか」と聞かれた。それで、私は「盛田久左工門の家の後継ぎです」と言って、「小林さん、あなた、どうして盛田久左工門をご存しなのですか」とうかがったら、山中に聞いたと言う。

小林一三さんも骨とうの大好きな方でしたからね。要するに山中骨とう店から、知多半島の盛田久左工門という家には、これこれこういう物があるということを聞いておられたんです。ことほどさように、山中にとっては、とてもいいお得意さんだったわけです。

そんなわけで、あんまり骨とうに入れ揚げて、商売をちっとも熱心にしなかったから、その間に番頭にすっかりいいようにやられてしまった。そして遂に、私の親父が、慶応の高等部の時に家が破産寸前の状態にまでなったそうです。

それで親父は、慶応の高等部まで東京にいたんですけど、とうとう大学へ行く前に、家のことを片づけなきゃいけないというので学校をやめて、故郷の小鈴谷に帰らざるを得なくなったんです。ところが、その二代前からたくさん骨とうが買ってあるから……。

井深 形を変えた財産があった。

盛田 結果としてね。それを全部売ったわけ。それを売ったお金で家業を再興したんです。

井深 やっぱ、それが生きたのね。

盛田 遊蕩に使わなっただけ、物に変わってたから。とんでもないところにまで有名になるぐらい骨とうを買ってあったから、それを売ってね。ですから、うちの親父はいつでも、とにかくお金は大事にしなきゃいかんと、懇々と私なんか叱られたわけ。そうしないと、おれみたいに学校を途中でやめなきゃならないことになるぞと。

井深 お父さんは、やっぱりお金というか、家のことで苦労なすったんだね。

父親の配慮

盛田 親父はもう苦労して、苦労しましたからね。それで、会社を井深さんと始めた時に、まだ我々には金がなくても、なかなか借りる力がないから、盛田家の酒屋の金をよく借りてきましたね。しかし、借りたのはいいんだけど返せないから、それを何だか先の分からない株券で返した。それが積み積み盛田家が大株主になっちゃったわけです。

井深 今度は骨とうの代わりに、ソニーの株券。なるほどおもしろいね（笑い）。

盛田 形が変わったわけ。けども、お金は大事にしなさいと。井深さんと私と二人でやったら、すぐお金がなくなっちゃうから、誰かお金のお目付け役をやらないかんと行って、親父が長谷川純一という人を送り込んできましたよね。もう亡くなりましたけど、最初の頃の経理部長。

長谷川さんというその人がまた、井深さんと僕がいろんな研究にお金を使い過ぎると言ってよく怒る。テープレコーダーの研究をする時にも、もうこれ以上、絶対お金を使っちゃいけません、テープレコーダーなんかやっちゃいけませんって怒る。

だけど、どうしても私は、井深さんとテープレコーダーをやりたいので、テープレコーダーは必ず商売になるからということで、何とかしてその長谷川経理部長を納得させなきゃならない。でも、井深さんと僕では信用してもらえないものですから、そのために、あとで副社長になった樋口さんを証人にして説得しましたね。当時、会社の前に若林という料理屋があって、その料理屋であの頃、やみの料理を食べさせてくれたもので、そこで一晩ごちそうしてビールを飲ませて、機嫌をとってごまかす（笑い）。

井深 とにかく、中の人からごまかさなきゃあならない（笑い）。

盛田 だから、証人が必要。そうしなきゃ、もう研究費を出しませんと言って長谷川さんが頑張るから。

井深 でも、あの人もおもしろい人だったよね。

盛田 がっちりとうちのおやじの薫陶を受けた人でしたからね。だからこそ、おやじがあの人をお目付け役として、つけてよこしたわけですから。

井深 一度、袋の口を閉めちゃったら、誰が何と言おうと、あける時は自分でちゃんと見きわ

める。

盛田 うちのおやじは自分がお金に苦労したから、自分で育てた大番頭をつけてよこしたわけ。
井深 でも、お父さんは、いろいろと随分優しいというか、心配してくださった。

つづく

井深対談

因縁に導かれるように……（４）

ゲスト：盛田 昭夫

盛田 昭夫（もりた・あきお）

1921年愛知県生まれ。1944年、大阪大学物理学部物理学科を卒業と同時に海軍に入り、技術中尉で終戦。

1946年、井深大氏とソニーの前身、東京通信工業を設立。

1971年、社長、1976年会長となり現在に至る。この間、モルガン銀行国際諮問委員ほか、欧米企業の顧問や、日米賢人会、日米経済諮問委員会のメンバーとしても活躍。日本きっての国際派経営者として、現在、経団連副会長。

1982年、英国王立芸術協会から日本人として初の、アルバート・メダル、そして1993年には、英国の産業振興と輸出促進への貢献により、名誉大英勲章を受章している。著書に『学歴無用論』『新実力主義』『MADE IN JAPAN』などがある。（財）幼児開発協会理事。

堅実が伝統

井深 お父さんは、いろいろと随分優しいというか、心配して下さった。

盛田 しかし、その長谷川経理部長も戦争中、兵隊さんで上海へ行ってまして、そのことで体を悪くしてたんですね。やっぱり、胸が悪くなって、結局、何年か後に亡くなってしまいましたから。それでは困るだろうというので、その後、今相談役になっている成田光三さんという人を、またおやじが自分のところで訓練してよこしてくれた。

そんなわけで、その成田さんが、また、先代さんに輪をかけた渋い、堅い人ですから（笑い）

井深 そんなに堅いの（笑い）

盛田 だけど、うちの伝統みたいに、成田さんがあれだけ堅くやってくれたから、今回のバブルがはじけた時も、ソニーには補てん問題も何も起きなかったと言えるでしょう。ソニーは本業以外、絶対変なお金を使っちゃいけないというのを、もう成田経理部長が懇々と言い、締めてきたから、あれだけ社会的にいろんな問題が出た時にも無事だった。ソニーにもお金はいっぱいあったんですからね（笑い）

要するに、実業以外の株式や、ああいう投資にお金を使わなかったのは、やっぱり、成田さんが絶対いけません、と言い続けていてくれたからなんですよ。それは盛田家が破産に瀕した時の、おやじの体験が伝わってきたとも言えるんだろうけど、とにかく堅くて堅くて（笑い）

井深 でも、お母さんもお父さんも、ソニーがちゃんと新しいものを開発するという、しっかりしたところまで、お達者でいてくださって良かったね。

盛田 父は晩年、車椅子になりましたけれど、車椅子で何回もソニーを見に来ましたしね。母もしょっちゅう来てましたから。母は亡くなってもう五年になりませんが、九十まで...
....

井深 お母さんをご長命だったものね。

盛田 父は七十七歳で亡くなりましたので、もう三十年になります。だから、ソニーがほんとうに大きくなったところまでは見てませんでしたけれど。ちょうど私たち一家がアメリカに住み込んでいた時に亡くなりました。

井深 でも、今考えると、そんなことにお金は出せないという長谷川さんのほうが、常識的に当たり前の感覚だったんだよね。海のものとも山のものとも分からない発想、ひらめきなんかは、どうしてそんなにお金を出せるかと.....。それをやみ料理を食べさせてまでも、何とかお金を出させたほうもまた、すごい.....（笑い）

盛田 しかしテープレコーダーには、井深さんだけじゃなく、私も学生時代から興味があったし、何としても実現させたかった。

井深 盛田君には、ほんとに.....お父さんがよく手離されたと思う。“本人が好きなことをやらせてください”って、かえすがえすも考えられないようなことを許して下さったわけだ。

子供の時から、一子相伝というか、古く続いた家を当然継ぐべきだった長男への教育ってものがあつただろうし。家訓とか慣例とか。

言わば、長年の家訓を破ったわけですよ、全くの例外として。長男を外に出していいよと言われたことは。でもほんとうに小さい時から、そこを継ぐように育てられたわけでしょう。お父さんが、私たちの前で決断してくださるまでは、帝王学をばっちり。

盛田 まあ、おやじと一緒に子供の時から社長室には、しょっちゅう連れて行かれましたね。将来は社長になるのだからと……。

井深 お父さんが慶応大学に行くのをやめて、傾いた家を、骨とうを売って新しい会社として興された時は、旧来の姿から今度はモダンな、ちゃんとした会社組織にしたわけなんですか。

盛田 知多半島の^{こすがや}小鈴谷という田舎にあったものを名古屋へ移して。

井深 新しい土地で、ほんとうに新生の一步から……。じゃ、お父さんは盛田家の中興の祖ね。

盛田 まあね、そういう意味ではね。終戦になってからまた、合資会社だったのを株式会社に变えましたしね。何百年と続いてきた中で固まっていたものに、大分いろんな改革をしたし。

おやじは、本質的には、やっぱり非常に新しいものが好きでした。パン屋も始めたし……。

第一次大戦の時 僕の生まれる前のことですから 中国に^{チンタオ}青島という所があるでしょう。当時、青島はドイツ領だったんですよ。それで第一次世界大戦では、日本軍は連合国側でしたから、青島を攻めたわけ。そして青島を占領して、そこにいたドイツの兵隊を捕虜にして、日本に連れて帰ってきたんですよ。名古屋にその捕虜収容所があった。

おやじと、またそのおやじのおじ貴というのが変わった人で、いろいろ新しいことを考え出す。その大おじは盛田善兵といいますが、ビールの製造を試みたり、いろいろやった人で、その頃は、小麦粉をつくる製粉会社をやっていたんです。

そこで、おやじとそのおじ貴とが語らって、将来は日本でもパンをつくらないかん世の中になるぞということで、名古屋の捕虜収容所からドイツ人の捕虜を^よ招んで来て、パンをつくることを習ったんです。『風見鶏』というNHKの朝のドラマがあったでしょう。

井深 神戸の風見鶏のある洋館が出てきたやつ？

盛田 そう、あれは、その会社の話なんですよ。

井深 へえー、そうなの。

盛田 『風見鶏』はその話。だから、あれにも捕虜が出てきて教える。フロイドリーブというのが、その時の人の名前なんです。今でも、神戸にフロイドリーブという、ドイツ菓子屋やレストランがあるんですけど 現在のご主人は多分その息子さんでしょう。そのおやじさんが捕虜で来ていたわけ。ああ、あるいはおじいさんかもしれないけど。

とにかく、うちのおやじはそういう新しいことが大好きでした。代々の本業では非常に保守的なところがあつたのに。

井深 じゃあ、代々、それが一つの気風のように、新しいことが好きな家系……。

盛田 東京にあるPascocoというパン屋がそれなんですよ。

井深 お世話になっております、Pascocoのパン（笑い）。

重なる知己の縁

盛田 私のおやじもそういうふうで、新しいものが本来好きだったんですよ。だから、私が新しいことをやりたいということに対しては、意識的にはあんまり反対ではなかったはずなんです。

井深 お父さんのパンも、発端からだともう古いね。

盛田 だから、第一次大戦の時、始めたんですから……当時は敷島製パンという会社でした。もとは、漢字で“敷島の大和心”の敷島製パンだった。それから仮名のシキシマになって。で、戦後、東京へ店を出す時に、敷島の大和心も、終戦でもう世の中が変わったからとパン・シキシマ・カンパニー。

井深 それでPascocoなんですか、ああ。

盛田 そうです。それでPascocoという名前になった。おやじは、自分も新しいことをそうやって試みたのだから、息子がやりたがっていることにも、十分、興味はあったはずなんです。いかに大事な息子だろうと止めきれないところがあったんじゃないですか。

井深 そこがこっちに幸いしたところだね。

盛田 会社を始める時には、また因縁があった。井深さんと岳父の前田多門さんと、前田さんの友達の田島道治さん、一高の時から同級生ですか。田島道治さんは、あの時、宮内庁長官でした。

その田島道治さんに、前田多門さんは、井深さんが会社を始めるけれども、自分には会社のことは分からないから、田島さんに見てやってくれて頼んでくださった。もとは銀行屋さんですから、田島さんは。それで田島さんにも力添えしてもらえた。ところが、その田島さんは、もともとの出発は愛知銀行からで、名古屋の方なんです。それで私も田島さんのことを存じ上げていた。

そして、田島さんが、会社をやるには何にしても金が要るからと、田島さんの親友で三井銀行（当時は帝国銀行、現在はさくら銀行）の万代順四郎さんを紹介してくださった。そうしたらまた、その紹介された万代さんと私の家は、私のじいさんの代からの付き合いなんです。酒造業の盛田の取引銀行が三井銀行だったんです。万代さんが名古屋支店の係長の時に、私のじいさんの仕事をしている。支店長になられた時、私は小学校の一年生でした。私、ちゃんと覚えています。小学校の一年生の時から万代さんの家へしょっちゅう連れて行かれた。万代さん、子供がないもんですから、僕はすごくかわいがられたんです。

井深 こっちの線からもあっちの線からも、同じ人につながっていったんだよ。ほんとに不思議

議。

盛田 そう、井深さんの岳父の前田さんが田島さんを紹介して、そして、その田島さんが僕のおやじのことまで知っていて、次に紹介された万代さんも私のことを、子供の頃から知ってて……後でお仲人をしていただいたほどですから。井深さんと僕とは、何か見えざる糸でつながっている。

井深 前世からの因縁って言うけど……いや、きょうの話はほんとうにそういう意味では不思議、不可思議。不思議、不思議がたくさん重なるから不可思議だね。

でも私のほうは身内の縁がものすごく薄いでしょう。反対に、盛田君のほうは、やたら縁が濃いというか……。その二人が会って、両方で足して二で割れるようにと、そういうものを感じるものね。

盛田 いや、そうなんです。だから、非常に深い因縁があるんです。

井深 大体、人生の方向を物理学に決める時に、阪大で浅田先生との出会いがあったわけでしょう。見学に行って、そのまま好きになって。そういうところがすごくあるのね。何だか分からないけど、感動してということなのでしょうね。

盛田 僕の人生って、やっぱり、非常にいい先輩に恵まれる……井深さんもその一人ですけれどね。学校の時から、とてもいい先生に恵まれたし。特に高等学校の時の服部先生とか、大好きな先生にね。

父の教育……旅

井深 だからこそお父さんとお母さんの教育を聞きたいものですね。そういうふうがいい人、いい先生に恵まれる大もとの……。

盛田 だけどそれは、ほんとうに恵まれたことなので。

井深 それはただ恵まれたというだけじゃあないでしょう。うちの中でもそういうふうには、例えば先生の悪口なんかは絶対言わない。ご両親がやっぱり、先生っていいものだというふうな雰囲気、自然のうちにつくっていたんでしょ。

盛田 両親ともそんなに厳格ではなかったですけどね、前にも言いましたが、うちはわりにはリベラルでしたから、好きなことをして育った。

井深 いや、でも、あの先生はいい先生だな、とかなんとかいうふうに、子供が自然にいい先生だなと思うような空気……。

盛田 どうなのでしょうね。とにかく、子供の時から、普通の人よりたくさんの人に自然のうちに会ってきましたからね。だから、人に会う時には、何となく人とたくさん知り合うことの大事さみたいなことを思うし。

井深 やっぱり、最初に人を信用するのかしらね、いいところを見つけて。

盛田 とにかく常に人がたくさんいて、大家族のうちでした。その上、私のおやじがまた若い人を集めるのが好きだったから、僕が子供の頃から周りにたくさん若い人が来てましたし、

自然にいろんな先輩ができました。その中で、いつも私のおやじは、本人がやる気を出さない限り、周りでしてやれる教育なんて何もない、だから親として子供にしてやれる教育というのあんまりないけども、自分がお金を出すことで教育になると思うのは、旅行をさせてやることだと。だから、学生の中に旅行をしろと言って、僕は高等学校の時に休みになると、必ず日本国内はもとよりのこと、朝鮮へ行ったり、満州へ行ったり。

井深 ああの当時の海外旅行だね。今と違って、大変なことだった。

盛田 そう、海外旅行ですよ。旧制高等学校一年生の時に、今の北朝鮮と韓国。おかげで、朝鮮半島は私、くまなく知っているんですよ。それも、一人ではなく、先輩の人と一緒に旅行しなさいって、ちゃんとおやじが金を出してくれた。

井深 随分、細かなところにまで気を配って……子煩悩なお父さんだったのね。

盛田 要するに、してやれることはそういうことしかないって、おやじはいつもそう言ってましたね。その次の年は、夏休みにまた、満州へ行って。やっぱり、先輩の大学生と二人でずっと……。ほんとうに、満州をくまなく見てきましたしね。その次の年には、大学へ行く前にアメリカに行きたかったわけ。しかしもう戦争になってしまって、行かれなくなってしまった。

井深 そうというのは、自分でここへ行きたいって決めるのじゃなくて、ここへ行って見ておいで、と言われるわけ？

盛田 どこでも旅行させてやるから、どこかへ行ってこいということで。とにかく「休みにぼやぼや家にいるな」と言われるので、出て行く（笑い）。だから私は、夏休みじゃない、ちょっとした休みでも、しょっちゅう、いろんな所へ行ってましたよ。そのせいか、中学生ぐらいの時から、一人でどこへでも出て行くのは平気でしたね。

井深 だから、戦後早くからアメリカに住み込むのも平気だったわけだ……。ほんとうの意味でリベラルな家庭だったんだね。

盛田 リベラルでしたね、そういう意味では。前にも言ったように、うちのおふくろも西洋音楽が好きでしたしね。

私のじいさんも、仕事熱心というよりもモダン趣味でした。僕と同じで髪は真っ白、おやじもそうでしたけれど、じいさんは白髪に真っ白なひげを生やしまして、その様子には似合わないほどモダン趣味。僕が中学生か小学校の高学年の頃だったと思うんだけど、じいさんに映画に連れて行ってもらったんですよ、それが外国映画の『キングコング』。

井深 それって、一番最初にできた『キングコング』かしら。昭和の初めだね。

盛田 多分。『会議は踊る』やなんかも、僕はおじいさんに連れて行って観ましたね。あの頃の映画というのは、要するに世界への窓でしたから。テレビもなければ何もないんだから、映画が来れば、見たこともないような情報が一杯。

ひらめき + 実感 = クリエーション

井深 でもまあ、五十年にわたる我々の縁、何とも言えないね。

盛田 そりゃそうですね。やっぱり、人生は縁です……。

井深 と言っても、めったにない、不思議な出会い。前世から会うべくして、というふうな人間で、多分いっぱい生まれてきているんだろうけど、みんながみんなうまく会えるとは限らないでしょう。

盛田 なかなかそうはいきませんわね。だから、私は運がよかったと思っています。ほんとうに私は人に恵まれて、先輩に恵まれてね。

井深 今、孫が進学の勉強で大変がってる。ちょうど微積をやってるあたりで、理科とかものすごく好きな子なんです。特に実験が。けども、数学のための数学みたいなのは大変だって言ってます。

盛田 理科系に進むなら、やっておかないと、あとで、いろんなことをする時に不便ですからね。

やっぱり、微分積分というのはどうしても要ることだから。昔からほんとうに高級な数学というか、大学の理学部って、物理数学っていうのがあるんです。要するに量子力学までいく。そういうのは僕は、昔から嫌いで嫌いで困った。

井深 ふーん、そうでしたか。

盛田 応用物理学の中の、実験物理学のほうが好きで、理論物理学のほうは全然弱かった。

何となく即物的 物にくっついていかないと、どうしても実感が湧かないんですよ。ところが、物理数学とか量子力学になると、目にも見えない 大体、三次元じゃなくて、四次元以上だからね 次元が全然違うわけですよ。量子力学になるとほんとうに、もう考え方が全然違うというか、我々のイメージではとっっても追いつかないところまで来てしまっている。

要するに、普通の力学で使わないイメージがいっぱい入ってくる、イメージの世界。今や、私の好きな実験物理学は古典物理学になってしまって、何か物とくっついてないと分からないという単純な領域。だから、古典実験物理学のほうの範疇しか私は分からない。

井深 でも、やっぱり、クリエイティブな新しいものは好きなのね。テープレコーダーやなんか初めてのもののへの激しいチャレンジ……。

盛田 それは井深さんが偉いから。何と言っても、井深さんの偉いところは、既存のものにとられずにクリエイティブにものを考えてきたこと。常識を基準とするなら、とんでもない発想をするし、いろんなものに恐るべき好奇心を持つ。

その意味では、僕も知りたい気持ちが非常に強くて、今でも、何でもかんでもなぜだろう、なぜだろうって思う。例えば、さっきTVで言ってた風速なんかだって、なぜメートルで言うんだろうと思うわけよ。

だって、考えてみると、風速は四〇メートルだ、五〇メートルだ、と言いながら、台風は時速三五キロだという。例えば、時速一〇〇キロと言われれば、自動車を運転している自分たちの感覚で、一〇〇キロというのは、ああ、こんな感じだと、その時に吹きつける

風とかいうのなら分かるけれど。それじゃ、時速一〇〇キロの風と言ったら、風速何メートルになるかという、すぐは分からないわけですよ。確か風速三〇メートルぐらいが、時速一〇〇キロぐらいになるわけです。

井深 秒速一メートルの風が時速三・六キロ……。

盛田 時速だとすぐ直感的にとらえられるでしょう。だから、風速三〇メートルというのは、時速一〇〇キロと言ったほうが、よく分かる。

時速二〇〇キロの風が吹いたって言えば、すぐ、新幹線の二〇〇キロと思い合わせて、ああ、あんなに速いのかと思うわけですよ。ただ風が秒速六〇メートルって言ったって、どのぐらい現実に速いかって分からない。

井深 ぱっとイメージが湧くかどうかということの問題ね。そういうことが好きな人なら、すぐ分かるんだろうけど。

盛田 いつでもそれをやっている人は、風速六〇メートルって言ったら、ああ、家が倒れるとか分かるんでしょう。よく気象庁で言うじゃない。微風というものはススキの葉がさらさら揺れる程度とか、大木の幹が動く程度だと何メートルだとか、そういうように、意外と観念的なんですよ。

昭和天皇の思い出

盛田 昭和天皇の思い出も深いですね。園遊会にお招^よばれた時、鹿児島工場にお出ましいただいたあとだったから、陛下が私の前にいらっしゃって、ご挨拶した時、「先日は鹿児島の工場にお越しいただきまして、ありがとうございます」とお礼を申し上げたら、陛下は「本社へも行ったでしょう」と（笑い）。それはその時から二十年あまりも前のことですよ。昭和天皇はちゃんと覚えておられた。「はい、お越し願いました。よくご記憶で、ありがとうございます」と思わずお礼を申し上げてしまいました。

井深 さんざん“これは内緒ですよ”って申し上げた時のことね。

盛田 そうそう、井深さんが、その時にできたばかりの、ソニーのオールトランジスタ世界最小・最軽量という五インチのマイクロテレビを天皇陛下にお目にかけて、陛下に、「これはまだ秘密の段階で内緒でございますから、どうかどなたにもお話しくださらぬように」と申し上げた。天皇陛下に口止めしたのは井深さんしかいないということで、これは有名な話なのよ（笑い）。全く自然に、天皇陛下に口止めしちゃった、傑作な話。

井深 昭和天皇に関して、私が一番感激して忘れられないのは、田島道治さんから聞いた話

。ある時、大きな台風がきた。東京直撃と言われていたのが逸^それてよそへ行ってしまった。そこで、宮内庁長官だった田島さんが陛下に「東京を逸^それてようございましたですね」と申し上げた。そしたら「少しもよくない」と憮然としておっしゃったそうです。

陛下のお立場からすれば、日本中のどこにも心配をなさっている。自分が居る東京だけ

のことを考える人間とは全く違うのだということに気づいて、田島さんは肅然と襟を正したと。

盛田 そう、口止めの話と今の話は切らないで、是非、対談に入れておいてください(笑い)。大変な話だから。

ほんとうにね 田島さんのおかげで、昭和天皇はソニーに興味をお持ちくださって。葉山の御用邸に行かれる時、前をお通りになると、うちの工場がだんだん大きくなるのを見ていらっやって、「田島の会社は、また大きくなったね」って、いつでもお話しになったそうです。

井深 随分お心細やかな方だったものね。

盛田 ソニーとは、なぜかご縁がありましたね。昭和天皇がまだご存命の間に、島津貢子さんの旦那様の島津さんが我が社へ入ってくださって、それを陛下にご報告したら「ああ、ソニーへ行ったか」と言って、とても喜んでくださったそうです。

あれ、ご存命中でほんとに良かったと思いますね。

井深 こうやって話してみると、いくら話してもつきない……。まだ三分の一くらいのところだから、続きはまた東京でやりましょう。

今日はほんとにありがとうございました。楽しかった！

おわり